

## レパトリーの増加における問題解決とクリエイティビティへの影響

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター  
辻本 勝洋

近年、芸術分野だけでなく、ビジネスやスポーツなど様々な分野でクリエイティビティの重要性が言われている。行動分析学においても問題解決やクリエイティビティの研究が行われており、それらの多くは分化強化手続きによって行動のレパトリーを増加させることが主な手法である。そのような手続きの中で新しい行動（反応）パターンの生起についての現象を扱ったり、あるいはそれを統制し、「クリエイティビティ」を生む基礎的な行動プロセスを検討するために「行動変動性 (behavioral variability)」という枠組みを挙げることができる。しかしながら、行動レパトリーの増加が問題解決を促すという先行研究では、問題解決に必要な行動レパトリーのみをシェイピングしているが、行動変動性は行動のばらつきをもたせるものであり、両者のレパトリーの増加方法は大きく異なっている。そのため、行動変動性の場合どのような環境下で手続きが行われなければならないのかを検討する必要がある。本研究では「問題」とは機能と制約がある状態とし、「問題解決」とは制約をクリアし、必要となる機能を満たした状態と定義した。そして「クリエイティビティ」を制約をクリアし、機能を満たした問題解決の方法のバリエーションの豊富さと定義した。そして本研究の目的は以下の4つであった。(1) どのような状況下で変動性をもたせるとよいのか、(2) 行動レパトリーを増加させるために自発した行動に対して分化強化手続きを行う群（自由群）と、その群が作ったもののモデルを見て同じものを作り、分化強化手続きを行った群（モデル群）との場合、問題解決にどのような違いがあるのか、(3) 行動の変動性を増加させた状況下、そして自発した行動によって行動レパトリーが増加した群とモデルを見て同じものを作って分化強化をされた群では、クリエイティビティについてどのように異なるのか、(4) 問題解決、そして高次の思考形式といわれているクリエイティビティが行動変動性の手続きによって促されるのか、という4つであった。

結果として、(1) 問題を解決するためには、実際の問題場面と同じような機能を満たし、難易度の低い制約をクリアする環境下でレパトリーを増加させることが必要であるということ、また(2) 自由群、モデル群との間で問題解決に差はほぼなかった。さらに(3) 機能と制約を含んだ状況下で変動性を持たせた群と、含んでいない群とではクリエイティビティにおいても差が見られたが、自由群、モデル群との間では大きな差が見られなかった。(4) 問題解決や高次の思考形式とされるクリエイティビティでは行動変動性の手続きによって効果が見られた。

問題解決やクリエイティビティには問題解決と同じ機能を含む環境下で行動レパトリーを増加させることがじゅうようであり、スポーツなど様々な分野で活かすことができるだろう。